

Science journalism: Too close for comfort

科学ジャーナリズムの歴史の変遷

Boyce Rensberger Nature Vol. 459(1055-1056)/25 June 2009

100年以上の歴史をもつ科学ジャーナリズムは、科学のチアリーダーから監視役へと進歩・変遷を遂げてきた。

1世紀以上前に誕生した科学ジャーナリズムは、その深い部分で重大な歴史的变化を遂げてきた。それは現代の科学ジャーナリストが認識しているよりも、はるかに根源的な変容だった。今日の科学記者の中には、情報源との関係が近すぎて困るとか、あるいは特定の分野に対して公平無私の分析ができなくなっている、といった不満を抱く人が少なくない。それはもっともな態度だと私は思う。彼らにとって、科学ジャーナリストという職業の誕生から現在までの足跡を振り返ることは、必ずや何らかの役に立つはずである。

1890年代にはまだ、たぶん米国にも英国にも専任の科学ジャーナリストは皆無だった。しかし、パートタイムの科学ジャーナリストなら有名な人物がいた。SF作家 H. G. Wells である。彼はサイエンスフィクションを執筆する合間に、純粋な科学的知

見について新聞記事を執筆していた。彼の主張は「ライターは、科学者の専門用語を翻訳し、文章技術を駆使して、専門外の読者の関心を引きつける必要がある」というものだった。1894年に発行された *Nature* の中で、Wells は、今日「物語的ノンフィクション」とよばれている技法の必要性を、次のように指摘している。「ポーの『モルグ街の殺人事件』やコナン・ドイルの『シャーロックホームズ』シリーズのような小説の根底にある構成の基本原則こそ、科学ライターが指針とすべきものである」(*Nature* 50, 300-301; 1894 参照)。

現在のニューヨークタイムズ紙を創刊した Adolph Ochs は、1904年、伝説の男 Carr Van Anda を編集局長に採用した。この男はおそらく、20世紀において科学に対する最も鋭い知性と感覚を備えた新聞社幹部だった。Van Anda は大学で天文学と物理学を学び、自ら科学記事を執筆するとともに、部下の記者たちにも科学記事を書くよう奨励した。彼が強調したのは、正確な記事を書くことだった。彼について頻りに引用される逸話が残っている。それは、同紙の記事で取り上げたアルバート・アインシュタインの講義における数学的な誤りを、彼が印刷直前に訂正したというものだ。もちろんアインシュタインと相談した上でのごとくではあったが。

当時の大部分の科学記者の仕事は、今とは違って、専門用語を翻訳し、科学者や医学界の第一人者の発言内容を説明することだった。その他、少数ではあるが、コーネル大学（米国、ニューヨーク州イサカ）で科学ジャーナリズム史を研究する Bruce



Lewenstein が指摘するような考え方をもつ人々もいた。すなわち、1930～1940年代の米国の新聞社に所属する少数の科学ジャーナリストたちは、社会を救済する手段として科学を一般市民が受け入れるよう、説得するのが自らの仕事だと信じていた (B. V. Lewenstein *Public Underst. Sci.* 1, 45-68; 1992)。これは、米国史における革新主義の時代 (Progressive Era) の産物・名残ともいえるものだった。革新主義は1890年代から1920年代までの米国を支配した考え方で、当時のあらゆるタイプの知識人は、社会を完璧なものにすることは可能であって、科学と技術の驚異によって、文明を理想状態に導くことができると信じた。

米国の科学記者は、こうした責務を果たすためには、科学者自身が科学記者をより真剣に受け入れる必要があると考えた。1934年には科学著述者協会 (NASW)



を設立し、自らの呼称についても、「ジャーナリスト」や「レポーター」ではなく、明確に「ライター」と名乗ったのである。このほうが、より専門性の高い職業というイメージを与えることができると考えたからだ。NASWの会員12人全員は、自分たちはエリート集団の一員であり、したがって安心して話をして欲しい、と科学者によびかけた。そして、会員以外は「真の科学ライター」ではないので、話をしないよう忠告した。かくして、私が科学報道の「これはすごい!時代 (Gee-Whiz Age)」とよぶ期間が始まった。この時代は、科学の驚異と科学者への尊敬が重視・強調され、進行中の科学研究に対する分析やその社会に対する影響の予測には、全く力が注がれなかった。

1937年、タイム誌の科学記者 George W. Gray は次のような言葉を残している。科学ジャーナリズムは、「科学的手法を社会大衆教育に不可欠な要素として組み込むために、そして、そのような社会教育を通して、科学的手法が文明的思考の普遍的な要素となるために」尽力すべきである、と。Gray は 1949 年に米国科学振興協会 (AAAS) から表彰されたが、その時、彼

は「一番大事なのは、科学者本人たちから認められることなのだ」とまくしたてた。

この時代の大半の期間、科学記者は1つの神話を追い求めていた。Lewensteinによれば、それは「科学者と科学ライターの正しい関係は、両者の間に信頼と尊敬が存在すること」というものだった。その典型的な例が、科学記者 William Laurence による世界初の原子爆弾開発をめざしたマンハッタン計画の記事にみることができる。

ニューヨークタイムズに記事を執筆していた Laurence は、一般市民が科学の真価を認めるよう望んでおり、彼のこの希望もまたよく知られていた。そのこともあって、米国陸軍省（現在の国防総省）は、マンハッタン計画と日本での原爆投下の機密を知らせる唯一の記者として、彼を選んだのである。実際、Laurence は軍内部に組み込まれた初期の科学ジャーナリストの一人だった。偶然にも彼は、第33代トルーマン大統領と陸軍省のために原子爆弾に関するプレスリリースを作成して、米国政府から給与を受け取っていたのだ。信じがたいことに、Laurence が政府のために働いていた事実は秘密にされなかった。今日のジャーナリストならば重大な利益相反行為と考えるだろうが、当時は誰も違和感をもたなかったのである。

チアリーダーから監視役へ

広島と長崎に原爆が投下された後、爆風が及んだ地域の外側であっても、多くの人々が病気になって死んでいるという噂が立った。そのため、陸軍省はニューメキシコ州のアラモゴード基地で記者会見を開いた。この件に関する Laurence の記事は次のように始まる。「地球上で初の原子爆弾の爆破実験が行われ、文明の新時代が始まった歴史的な、ここニューメキシコの地は、爆弾投下日以降も続出している死者の原因が放射能だとする日本の宣伝工作に対する、最も有効な答えである」。そしてこの記事で、アラモゴード基地の見

学によって「そうした主張がウソであることが証明される」だろうと書いた。ジャーナリズム界は、Laurence が科学ジャーナリズムの極致を体現していると思われ、Laurence は 1946 年にピューリッツァー賞を受賞した。

1950年代に入ると、科学ジャーナリストは、科学の実用的意義や社会への影響よりも、科学的発見、すなわち科学自体の喜びの方が重視されるべきである、という信念を記すことが多くなった。NASW 会員の間では、いかにすれば科学ジャーナリズムが「より効果的」なものとなるか、方法論についての議論が多くなった。しかしその目的は、科学ジャーナリズムが科学の監視役としての機能を強めるためではなく、従来よりも幅広い層の国民に科学の真価を認めさせるためであった。私は、この姿勢・態度こそが、当時の新聞社幹部が自社の科学ライターや医事ライターに不信感を持ち始めた理由だと考えている。結局のところ、ニュース編集室では、どの分野の記者であっても、取材対象に対しては公平無私、時には挑戦的ともいえる姿勢によって評価されるからである。

ほどなく、科学ジャーナリズムの「これはすごい!時代」に亀裂が生じ始めた。1962年、レイチェル・カーソンの『沈黙の春 (Silent Spring)』が出版され、殺虫剤 DDT によって鳥類の卵の殻が弱くなり、野生動物の殺戮につながる浮き彫りにされた。ところが殺虫剤は、科学技術の驚異であり、一般市民が称賛・受容すべきものとして報じられてきたため、科学ジャーナリストは葛藤することになった。『沈黙の春』は感情的で偏見にとらわれている、と厳しく批判した者もいた。Time や Fortune に記事を書いていた Lawrence Lessing は、カーソンを攻撃し、科学の最高の著述は、米国化学会や賢明な化学業界との共同作業によって達成されると主張した。そこでは「現役の科学者と科学ライターが対話を深め、公共の利益にまで高めていく」という。しかし、『沈黙の春』と

著作権等の理由により画像を掲載することができません。

William Laurence (左) は、J. Robert Oppenheimer (右) の原子爆弾に関する記事を執筆する一方で、米国陸軍省のプレスリリースも作成した。

彼女の「産業界の主張を無批判に受け取るべきではない」という見解は、環境保護運動の立上げだけでなく、環境報道という新分野を生み出すことにもなった。環境分野の記者は、科学者、特に産業界から資金提供を受けている研究に対して、より批判的な姿勢をとるようになった。

1970年代には、技術に潜むマイナス面がますます表に現れてきた。その象徴ともいえるのが、ペンシルベニア州ハリスバーグ近郊のスリーマイル島原子力発電所における原子炉溶融事故であった。その頃には、科学ジャーナリストが記事を書く際に、記事のテーマがもつ社会的・政治的影響を無視することはできなくなっていた。こうして、科学ジャーナリズム史における次の重要な時代である「監視役としての時代」が始まった。科学記者の姿は、ニュース編集室の他分野の同僚にかなり近づいていったのである。

紙メディアの衰退

この時代に、科学ジャーナリズムは量的にもブーム、繁栄期を迎えた。1978年にニューヨークタイムズの科学欄が誕生した

のは、その先駆けだった。ある統計によれば、このブームがピークに達した1987年には、147の新聞に少なくとも週1回の科学記事のページが作られ、老舗の*Scientific American*と*Science News*に加えて、4つのポピュラー科学雑誌が創刊された。しかし残念ながら、このブームは長続きしなかった。1980年代後半になって雑誌の上げ潮期は終わりを告げ、現在も老舗誌のはざままで健闘している*Discover*を除き、新興雑誌はすべて黒字化を果たせず廃刊となった。新聞の科学欄の数も減り始め、今日も生き残っているわずかの科学欄を残して、すべて消滅した。

「デジタル時代」に入ったことが明らかになった現代にあって、ジャーナリズムの定義そのものが変化しつつある。そして、その方向性も不透明だ。科学ジャーナリズムは、科学界の栄光のために仕える役割をやめ、独立性を取り戻し、一般市民に対して新たな責任を果たすようになっていく。現在、伝統的な報道機関は衰退しつつあり、多くのジャーナリストは、インターネット上で自ら記事を発信し、全面的な独立を獲得して、一般市民との直接のつな

がりを得ている。一方で、科学者もインターネットを利用して、ジャーナリストを完全に飛び越えて、その研究成果や研究計画を一般市民に直接提示している。読者にとっては、公平無私な情報源と何らかの思惑のある情報源とを見分けることが、ますます難しくなっている。

科学ジャーナリストが、再び、社会にとって意義ある存在となるには、新しいメディアを習得するだけでなく、新知見を解析、解釈し、資金提供者の意図までも見抜くために、十分な科学知識を学ばなければならない。しかし事はそれだけではすまない。実用化までにはまだ時間のある開発段階の新技术であっても、一石を投げられる間に、その技術の社会的影響力を予測・予見できなければならないのである。(菊川要 訳) ■

Boyce Rensberger は、1998～2008年にマサチューセッツ工科大学（米国ケンブリッジ）の「ナイト科学ジャーナリズム・フェローシップ」プログラムのディレクターをつとめ、科学記者として32年間の実績がある。主にワシントンポスト紙とニューヨークタイムズ紙の記事を執筆した。